

2012年 8月11日・上毛新聞 「旬の人」欄では

詩人 井上 優さん

人類愛 書き続ける 脱原発テーマの詩集に寄稿

小学生のころから国語の教科書を手に入れると、2日で一気に読み終えた。「活字中毒。とにかく本が好きだった」

詩作を始めたのは、前橋高校1年の時の不思議な体験がきっかけ。ある日、夕日や木々など自宅庭から眺めた見慣れたはずの景色すべてがこれまでと違って見えたという。「この世にいる感覚ではなかった。書くスピードに追いつかないほど次々と言葉が降りてきた」

20代前半から世界20カ国を旅したり、8年間の英国留学を経験。「海外生活でその後の詩作に生きる多様な価値観が養われた」

27歳の時、ロンドンの日本人教会青年部・芸術発表会で自作の詩を朗読したことで出会いの輪が広がり、英国から日本の月刊詩誌「詩と思想」への投稿を始めることになった。「楽しさを知り、本気で一生続けたいと思うようになった」

キリスト教徒であり、詩のテーマの根底には人類愛がある。「愛が少ないと感じる現代の日本に少しでも立ち向かいたい」との思いも創作のエネルギーになっている。

3・11以降、原発問題に強い関心を寄せる。昨年発行した第2詩集「厚い手のひら」(コールサック社)では、家族への愛をテーマにしているほか、福島へ震災ボランティアに行った体験や放射能についての思いも表現した。7月に発売された「脱原発・自然エネルギー 218人詩集」(同)には国内外の詩人とともに、原発にかかわる事象を題材にした作品を2編掲載している。

「言葉に内在するリズム、使用する文字や行間の空け方などによって、話し言葉では伝えられないものを伝えることができるのが詩の魅力。人類愛を基本に、心から納得いく作品を書き続けたい」

と紹介されています。